

梅澤利二教授，田中一教授を送る

社会情報学部長 狩野 陽

札幌学院大学が創基五十周年を迎え、その社会情報学部が設置後6年を閲みし三期目の卒業生を送り出す時季となりました。この春に当たり、学部創設に力を尽くし、学部を育て、学部当初の教育の柱である情報学概論、電子工学概論をそれぞれ担当され、教育と研究の発展を一貫して担われたお二人の教授の定年をお迎えするにいたりました。ここに、学部における、梅澤教授と田中教授の最終講演の会合を、1996年度最終の学部月例研究会の特別の行事として、開催いたします。

通常ならばフェアウェルレクチャーは学生に対する最終の講義になりますが、この大学では、お別れのこの時期には学生の受けるべき授業が既に終了しています。学部では、月毎に、活動の重要な一つの柱として、研究者の談話会、研究会を学部の雑事を超えて定期的に開催し、活発な交流と討論を続けてきました。学部の尊重する行事の一つである研究会のあり方を拡大して、両教授の学部スタッフとしての最終のレクチャーをいただくことにいたしました。

この年、両先生が定年をもってご退任になられるのは、未だ短い歴史ながら、この学部にとって一時期を画することになります。ここに最終講演の研究会の時を迎えたことは、両先生にも、また、これをお聞きになる学部内あるいは学部外の関係の方たちにあっても感慨深いものがあると思います。

梅澤先生と田中先生は、ともに関東大震災の翌年である大正13年、1924年にお生まれになりました。梅澤先生は少し早くて7月、それから田中先生は11月の誕生でした。

梅澤先生は、悠揚として、1950年に北海道大学工学部の電気工学科をご卒業になりました。田中先生は、かなりせっかちに1943年、これは昭和18年の戦時中でしたが、第三高等学校を卒業され、京都大学の理学部物理学科にお入りになり、戦後の昭和21年、21歳の年に、21歳と申しましても、先生は10月前後の卒業なのでかなりぎりぎりの21歳ですが、遅生れとしては最年少で、日本の学制上、旧制としては最も短い中学校、高等学校、大学の年限で駆け抜けてゆかれたことになります。

別して梅澤先生がゆっくりに過ぎていくわけではなく、殊のほか田中先生の修学は、常軌を逸せずして、尋常ならざる速さでありました。

これには、田中先生の学業の時期に戦時下の高等学校、大学の卒業繰り上げの制度が加わり年限が短縮されていった面もあり、先生の秀才の上に更に輝きを与えることはいらぬかと思いますが、この中で少年時より達成が高く俊敏な俊才であることは確かであり、この密度の高い急進の活動時間は、田中先生の爾後のお仕事にも一貫しました。

しかも、とにかくその時代も先行きの見込みもなく事を急ぐ時期ではありました。

それは、およそ大学でおちおち勉学できるような時期ではありませんでした。

しかし、その中であって唯一つ、大学の研究領域の中でも稀なあり方として、京都大学の物理学の教室は、その当時、大阪大学から湯川秀樹先生がお帰りになられて、一つのいわば学問の中心として揺るぎない理論の運動を開始していた時でした。先生はその真っ只中にお入りにな

られた。短いながら非常に緊迫した時期をお過ごしになって、卒業後、直ちに副手の仕事につかれました。おそらくその副手になられた時期から今までが、研究教育の50年ということになるかと思えます。

一方、梅澤先生は、卒業後、北海道大学応用電気研究所にお入りになりました。

そこでは、例えば、巻き煙草に発生するカビに対して、高周波誘電により加熱する条件を操作して殺菌し、防黴する効果を測定して技術を確定し、理論を構築するという当時工学部の浅見教授たちの仕事、叱音アークの脈動、半導体整流器の特性回復に有効なガンマ線照射の発見とメカニズムの解明、当時、脚光を浴びたゲルマニウム点接触型整流器へのベータ線照射の効果の測定についての小沢教授たちとの共同研究と、相次ぐ研究開発に力を尽くす日々を送られました。

このように、先生の研究の初期の段階で既に、半導体素子の活動特性が主題となって研究が組み立てられていて、その条件操作により効率を改善する研究が進行しています。これは日本の中でも比較的初期からの研究の試みであり、おそらく、そこから本日の標題の「薄膜素子40年」が由来するのであろうと思えます。

梅澤先生は、その後、放射線技師学校等で講師としてお働きになられて、レントゲン線の被爆、その照射方法の改善という医学への工学的貢献に力を発揮されました。

放射線治療時のパラフィン人体模型を作り、輪切りしてその着色量で空間的な線量の連続的分布を測定するという効率的な方法の開発にいたりました。これが、ハーバード大学における共同研究として当時の国際放射線医学会の学会賞の対象となりました。

多面にわたる多産な研究活動の中で北見工業大学に教授として赴任され、最終的に電子回路のチップ薄膜の形成による電気的特性の改善という一連の組織的な研究開発の仕事を結びつけ、コンピュータの性能の進化を支えてこられたこととなります。この面で、日本における計算機科学の基礎を地道に着実に築かれてきた工学者の一人ではありますが、梅澤先生は、研究開発のいろいろな着想とともに豊かな遊びもおもちになり、電気エネルギーを貯蔵できない半導体太陽電池を補う水素エネルギーへの変換貯蔵の工夫を端緒としてソーラーカーの開発も、この当時のお仕事から生れています。

札幌学院大学に来られて電子工学概論の講義を担当いただきましたけれど、計算機科学の工学的基礎を学生に設定する重要さは当然失われてはいませんが、学生の研修可能な領域をしばる中で、その流れは、新しいカリキュラムで縮小されて現在にいたっています。他の面から見ると、これは計算機科学の分化が進み、社会情報学の領域が特定化してきた過程であり、その基礎を梅澤先生がお作りになったことは学部にとって大変負うところが大きいと思えます。

社会情報学部とはいえ、本来、札幌学院大学のような文系、社会系の大学で工学的研究開発を進めるのは、多くの障害と困難があり、その現場である大学の校舎も、ここでスパッタ法等によって薄膜の蒸着形成の実験研究をおこなうには、構造上この建物は無理ではないかとの危惧もありましたが、その中で先生は孜孜として実験を組み立てて数多くの知見を提出されて今日にいたりました。ここ暫くは健康を害されて、計画されたダイヤモンド薄膜の単結晶化の実験シリーズは未完に留まっていますが、皆様がご覧になっておわかりなるように、実験室と思われないほどきれいな傷つかない状態で、この研究室を大切に使っていただきました。工学部とはいわず多くの実験室はだいたい煤け破れてひどい状態となり、それはそれ研究達成上やむをえない面もありますけれど、それらのお手本になるような仕方で先生は実験をお進め

になりこの校舎を大事にさせていただいたことを、今になって感謝申し上げます。

田中一先生の学問に関しましては、私は、これまで二度にわたって先生の仕事に触れる機会がありました。個人的関わりで恐縮に思いますけれど、最初は20年近く前でした。その当時、北海道大学教育学部が30年の区切りを迎えて、いったい教育学部とは何であり、何であろうとするかを自ら問題として、大学院博士課程をもち教員養成を主目的としない教育学部の存在理由を問い、存立の可能性を問う試みをしました。私は消滅させる可能性もふくめて検討しようと、その当時思い、東京大学と京都大学の教育学部長と相談をいたし、その課題でとにかくシンポジウムを開催し、その後で研究会をすることにいたしました。その当時、大学院の博士過程を持つ教育学部というものが全国に散らばっていましたので、それら東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学の関連学部長に全部集っていただき、論議を尽くして、消滅させることも覚悟の上で討論をして欲しいと申しました。その時に、北大を代表する学者として討論いただく研究者の人選をおこない、幾人かの候補者が挙がりました。失礼ではありましたがその時に挙がった全員について業績を拝見をいたしました。その中で田中先生が浮び上がってまいりました。田中先生の研究方法は、きわめて正攻法で、簡明直截に問題の所在を直視し、方法は組織的で、それを明視されていました。教育学部に限らずとも社会科学の研究集団にとって、貴重な提言となるだろう、これは聴くべきであると判断して、先生の研究室をお訪ねしました。

で、まあシンポジウムは盛大とはなりましたが、つまりは不成功でして、何のことはなく終わってしまいました。その点、先生にはご出馬をいただきながら、たいへん勿体ない仕儀とはなりました。私は、その会合の終りにこのシンポジウムは失敗だということを申しましたけれど、ご提言には意義があり、熱の入った論議であることは確かでありました。

もう一つは一冊の書物のことになります。「クラスター'88」という、京都での国際カンファレンスの報告書を、これは八百数十頁の本となっていますけれども、先生からいただいた時でした。そのカンファレンスの報告書の最初に、組織委員長としての田中一教授の序文が載っております。原子核クラスタリング研究は、当初は限定された核の少数事象にのみ妥当する研究のあり方だと考えられてきたけれど、原子核内のシステムに広範に妥当する見解だということが認められるようになった。さらに、それにとどまらず、マイクロ・モレキュール～モレキュールの領域を越えて適用が拡大し、事象そのものを考えるきわめて有効な研究方法となったと主張されています。これはこの会議に限らず、学会を開催する立場にある者は、自らの状況にいつもそういうことを申してしまして、別にそこは感心はしないのですが、そのあとが問題の内容になります。そこで一転して、先生は、それではこれら状況の根底にある、この複雑な事象のいわば基本にある原理と事実は何か、を問うています。それは、そのときも、そして今でも印象的な言葉なので、そのままお伝えします。一応先程確認をいたしましたから間違いはないと思いますが、それは、What is the principle or the fact in this case?と記されています。これは、英語を母国語とする学者にあっても、ぎくりとする言葉でありましょう。普通は、このように端的には問わない。なんとなくウィットの込めた言葉で言いたくなることなのですが、このように真正面に事態の根底にある真のものを問うというあり方が、田中一先生の学問の、仕事の、そして生き方の基本であると思います。これが社会情報学部の形成のもとになったこととなります。

社会情報学がどのように有効であるかということ以上に先生は、それが何であるかというこ

とを基本課題とされました。ですから今度の最新号の紀要に載るはずである論文は、そういう問いかけを如何に発するかという問題に発しています。そういう点で、先生は、問いを立てるそのあり方とそれをいかに解くか、いかになすかについて、おそらく何かの形で少年期、青年期に始まる何かの火花の感受があったのでしょうか。しかし、物事に直面して怯まない、おそれない、そして事態を直視して解決をするというきわめて勤勉実直な精神というものを少年期からお持ちであったかと思えます。おそらくその必然的な産物として短い年限での修行時代も生じたのであろうと思えます。しかし、そういう問いかけは、必ずしも普通に理解されている課題と同じではありません。普通、ドイツ語で課題や問題というとき、Aufgabeと申します。この語感では、ドイツ人は、Aufgabe、問題というものを、das Aufgegebene、つまり前に与えられたものとして受け取っていることとなります。これが、問題の事象とか対象とかに向かうドイツ人の営為のもとになっているかと思えます。しかし、先生はアウフゲゲーベネという課題の与えられたあり方にとどまらず、その問いつめる自分自身を、真正面に直面させ、アクティヴに問題を解決する、さらに自ら問題を見出す方法をとることを信条とし、それに邁進されたこととなります。

私が、湯川先生を知ることは多くありませんが、その知るかぎりでは、この態度の一面が両者を分かちように見えます。

この研究の態度から、田中先生の、1970年代以降のいわば啓蒙的な所産である研究過程論が成立してくると思えます。これは結果としては、その当時から今日にいたるまでの理系、社会系を問わず、大学院学生にとっての研究のバイブルになったかと思えます。この書物自体は先生のサービスの発露ですが、ここで書かれていることは、紛れもなく先生自身の仕事の進め方の直接的な報告であり、自らなすべき当のことです。

学部創設に当たっても、その態度は貫かれ、学部には、教員にあっても、職員にあっても、さらに学生の中にも、その筋道を刻みました。また昨年度、それが社会情報学会を誕生させたこととなります。恐らくその気迫がこの大学の中の学部を産んだことになるかと思えます。

私は、この大学に来て、しばらくして、ある公立大学から学長につくことを切実に求められたことがありました。私は、その仕事を避けるしかないと思いましたが、その窮状は見るに見兼ねておりました。当時、そのことを学部長である田中先生にご報告をいたしました。その時に、私はそれに応ずる田中先生の気迫の中に人間に対する信義と、それからこの組織体を責任をもって遂行していく厳しさと、その中で日々刻苦しておられるご覚悟のほどを拝見



いたしました。

私は、どちらかといえば組織というものを人を大切にする形で進めますけれど、田中先生は、やはりその両立、つまりこちらのほうが現実的ですが、組織を立て人を生かす努力を重ねてこられた。学部の創設の基礎を作られたこのあり方が、おそらくこれからあとのこの大学を生かし、危機に対処していく一つの支えになるかと思います。

社会情報学部が、田中先生そして梅澤先生を、これから欠くことは、ある面において、残る学部構成員にとって決意を、自らに厳しい決意を迫ることになります。そういう点で両先生に学部の深い敬意と謝意を表するとともに、これから先の学部へのご提言の意義をも込めて今日の最終講演をお聞きしたいと思います。

非常に長くなりまして恐縮に思いますが、これでご挨拶といたします。